

書評

長井苑子 著

間質性肺疾患の外来診療

大阪医科大学・膠原病内科

榎 野 茂 樹

1988年、私は、京都大学の免疫研究所でリンパ球を表面マーカーで染色しフローサイトメトリーで測定する実験に従事していました。当時所属した研究室には自前のフローサイトメーターがなく、検査会社の器械を会社の仕事で済んだ後、好意で使用させてもらっていました。夜9時、10時になって染色したリンパ球を持って検査会社に行くと2台あるフローサイトメーターのもう1台を使って1人で黙々と測定している人がいました。それが本書の著者、長井先生でした。その頃、著者は「びまん性肺疾患研究会」で、気管支肺胞洗浄のデータの第一人者として中心的ディスカッサーであり舌鋒鋭く議論され、「凄い人だなあ」と仰ぎ見ていた方でしたが、データは自分自身で作られたものなのだと感心したのを覚えています。

その後20年、著者は間質性肺

疾患の領域で私を含め多くの研究者をリードして来られました。特発性間質性肺炎の分類は最近ようやくほぼ定まり、吸入性のものや、膠原病性、薬剤によるものなどとの異同が議論できるようになってきました。

今回、著者は長い間質性肺疾患の臨床経験の集大成として本書「間質性肺疾患の外来診療」を書かれたと思います。今までの間質性肺疾患について書かれた日本語の総説書は、幾人かの専門家が分担執筆したもので、一人の著者が一貫して書いたものは初めてではないかと思います。著者の経験と知識をもって初めてできたものと考えますし、また、そのため、著者の間質性肺疾患に対する思想、スタンスが本書を通して明確になっているのが強く感じられます。

本書の特徴と私が感じたことは、1つにはその完成度の高さと

内容の濃密さです。本書には図表が多く、それぞれ、この疾患領域の重要なデータが選ばれており、文章と併せ膨大な知識を提供しています。もう1つは、間質性肺疾患の治療管理に踏み込んだ記述をしていることです。いままでの総説書が診断を重視しているのに対し、本書は治療管理に多くの頁を割き、「間質性肺疾患の臨床経過と管理方針」「間質性肺炎管理・治療方針のまとめ」といった複数の章を作り、また本文中ではステロイド漸減の詳細など治療管理の詳細も記述していることです。さらにもう1つ、著者の患者に対する見方を示している点です。患者の人格を尊重した著者の考え方がコラム欄などを通して一貫して示されるとともに、今までの総説書にない「患者と家族への対応」の章も立てられています。

著者はこの本で「外来診療」という初心者向けと感じる題名とは矛盾するような深い内容を提示しており、間質性肺疾患に取り組むわれわれに、もっとハイレベルの医療を実践するよう啓発しているようにも感じます。

〔B5 頁184 2007年 定価
5,985円(本体5,700円+税5%) 医学書院刊〕